東洋大生と地域がつくるトキ保全活動

東洋大学里山サポーターズ
竹田　安里（代表）
杉村　優
岸本　康佑
弘中　瑛裕

（発表概要）

【東洋大学里山サポーターズの活動】

里山サポーターズは、新潟県佐渡市新穂潟上地区において、トキの餌場作りを手伝うとともに、鬼太鼓や子どもたちとの交流などを通じて地域の賑わいを取り戻すことを目的に活動している。また、東洋大学の創設者である井上円了の出身地が新潟県であることから、佐渡国巡講をもとに跡地巡りも実施した。さらに、夏季休暇中の活動を踏まえ、論文執筆にも取り組んだ。

本活動は、かつてゼミ単位で行われていたが、新型コロナウイルスの影響で一時中断し、2023 年度より東洋大学準公認サークルとして活動を再開した。私たちは、佐渡市の豊かな自然や歴史・文化に関心を持ち、大学生として社会に貢献したいという思いを共有する中で、サークルを設立するに至った。

【第 12 回宮本賞】

日中関係学会が主催する「宮本賞学生懸賞論文」に応募するため、新潟県佐渡市において井上円了に関する調査を行った。「宮本賞学生懸賞論文」は、日本と中国・東アジアの関係に関心を持ち、より良い関係構築に貢献することを目的として 2012 年に創設された。2023 年度の第 12 回宮本賞に応募した論文のテーマは、「日中学生と地域協働による『第二のふるさとづくり』の提案 ～新潟県佐渡市を事例に～」であり、佐渡市を舞台に、日中の学生が地域の課題解決に協働する可能性について考察した。その結果、学生の部において優秀賞を受賞することができた。

【論文の概要】

本論文では、訪日外国人の中でも特に訪日中国人に注目し、今後増加するであろう訪日中国人の「第二のふるさと」体験に着目した。日本全国に存在する「第二のふるさと」の可能性を広げることを目的とした。

論文執筆にあたり、東洋大学創設者である井上円了が残した「佐渡国巡講日誌」を活用した。この巡講日誌をもとに、井上円了が佐渡で歩んだ足跡を実際にたどり、それをきっかけとして現地の人々との交流を図ることを考えた。足跡をたどる過程で、井上円

了の活動に加え、佐渡の土地・文化・歴史についての事前理解を深めることができた。
　また、ボランティア活動の一環としてトキの歴史学習を行った際、現在佐渡に生息するトキは中国から贈られた個体が原点であることが判明した。活動に同行した中国人留学生もこの事実を知らなかったため、このトキ保護の歴史を日中友好の象徴として中国に発信する意義を見出すことができた。
　この経験を通じて、地域との関係構築において、訪問者が地域の文化や歴史を深く理解し、受動的に受け入れるだけでなく、主体的に学び、関わる姿勢が重要であることを強く感じた。

【第 13 回宮本賞】
　本研究の背景として，日本の子育ては、当初は「家族」が中心となる第 1 フェーズから、学校や幼稚園など公的・私的施設による支援が加わる第 2 フェーズへと進化してきた。しかし、家族関係の多様化や地域社会の教育力の低下により、これらの仕組みでは十分に対応できなくなっている。福祉レジームの観点では、日本と中国は「自由主義」と「保守主義」の特徴を併せ持ち、これらを基盤に新しい子育てモデルの可能性が議論されている。
　本研究は、新潟県佐渡市の「子ども未来舎りぜむ」の取り組みを事例とし、第 1・第 2 フェーズの限界を超えた「第 3 フェーズ」としての子育てモデルを提案することを目的とする。このモデルが日本のみならず、中国や他国にも応用可能であることを示し、地域社会が主体的に関与することで世代や地域を超えた相互の関わりを促進するものとする。
　現状として、子どもが「家庭」と「社会」の両方で安心できる居場所が欠如しており、地域全体の不安定化が進んでいる。中国は福祉レジームが類似しており、日本の子育て支援モデルを適用できる可能性がある。これを踏まえ、新しい子育てモデルとして「りぜむ」のような地域密着型施設を提案する。さらに、中国などの類似福祉レジームを持つ国々への応用を視野に入れ、無料・低価格での持続可能な運営を実現するための資金調達手法についても検討する。
　また，先行研究や事例分析を行い、井上円了による京北幼稚園の事例を参考とした。「りぜむ」を訪問し、職員や利用者へのインタビュー、施設の観察を実施するとともに、事業報告書や収支決算書を基に財務状況を分析した。
「りぜむ」は、子どもの主体性を育む環境、柔軟な利用時間、多世代交流、地域密着を特徴とし、従来の学童施設を超えた新しい「社会的居場所」として機能している。一方で、運営は助成金や寄付金に依存しており、持続可能性が課題となる。